# 1［随筆］『日本映画の「新約」のために』

［１］　は『民間伝承論』（一九三四）のなかで書いている。

　「自分ではまで人の気づかぬ方面にづを入れて人を誘ひ、そこにやつて来る人が多くなると次の問題に移るやうにして、断えず努力して前線を拡げて来たのであつた。」

［２］　柳田がこうした感慨をふとらしたのは、五〇歳代の終わりを迎えたときである。それまでａ好事家の随筆だと見なされていた①民俗学を学として成立させ、なんとか社会的に認知させるため、彼はすべての領域を独力で走破する必要を感じてきた。そのため恋愛詩人としての業績を惜し気なく切り捨て、科学としての体裁を整えるためあえて不得手な理論に取り組んだり、方法論の是非をめぐって後続の研究者とを分かつことすら辞さなかった。

［３］　いうまでもなくわたしには大柳田の才はなく、学の泰斗として振舞うだけの度量も勇気もない。［　　Ａ　　］大学で映画学を講じ出して二〇年以上の歳月が経過し、とりわけ日本映画とは何かという巨大な問いをわが事として受けとめ悪戦苦闘してきた時間のことを振り返ってみると、わたしにはほぼ同じ年齢であった柳田の気持ちが②スコブル理解できるのである。柳田が一人称複数で書き記した公式的な書物である『民間伝承論』のなかに、こっそりと「自分」という表現を用いて書き付けたこの短い独白に、わたしは共感を覚える。［　　Ｂ　　］学問の規模に大きなｂヘダたりがあったとしても。

［４］　思えば若き日にＴＶの洋画番組の解説者として開始されたわたしの映画との関わりは、三〇年以上の時間のうちでさまざまに分岐してきた。わたしは韓国映画の連続上映を行ない、活動弁士の再検討にはじまる日本映画の研究会を月に一度のペースで組織した。今は亡きの聞書きを行い、のイタリア留学体験を調査した。わたしはこうした作業を自分なりに重要なこととは信じていたが、それはその当時はまったく省みられておらず、映画評論家の誰もが関心さえ向けようとしなかった領野であった。

［５］　やがて圧倒的な韓国映画ブームが到来し、わたしの大学院のゼミに、ローマにおける増村の足跡をめぐって修士論文を書きにきたイタリア人留学生が到来するようになったとき、③わたしはもう自分がその場を離れてもいいと決めた。［　　Ｃ　　］まだ誰も手をつけていない、アジアにおける怪奇映画と社会的・ジェンダー的ｃギセイ者の表象へと研究主題を変更すると、次々と転戦していった。日本映画の研究会は八年続いた後、一〇〇回をもって終了した。そこからは何人もの独自の研究者がｄハイシュツし、今回のシリーズに寄稿してくださった。そう、わたしは映画研究の領域を拡大することに文字通り無我夢中であった。いささかｅ大袈裟な表現になるかもしれないが、映画学と日本文化論の交錯する地点に成立する日本映画研究という知の領域を、日本美術研究や日本文学研究と同じく、学問として成立させることに④腐心してきた。柳田がいうように、⑤転戦につぐ転戦によって戦線の全体を拡大するというのが、わたしの採った戦略であったのだ。

問１　空欄Ａ〜Ｃに入る適当な語句を、次から選べ。（4点×3）

ア　そして　　イ　しかも　　ウ　だが　　エ　たとえ　　オ　つまり

Ａ〔　　〕Ｂ〔　　〕Ｃ〔　　〕

問２　傍線部①「民俗学を学として成立させ、なんとか社会的に認知させる」ために柳田國男は努力したが、筆者はどういうことに努力したというのか。本文中の語句を用いて三〇字以内で答えよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②とあるが、筆者が「スコブル」とカタカナ表記をしている理由と考えられるものを、次から選べ。（7点）

ア　詩人としての業績を切り捨てるまでの柳田の民俗学への情熱は、日本映画研究への自分の思いと重なり、とても同感できるため。

イ　学問の規模は大きく違うが、それぞれの学問を成立させたいという気概は、柳田も自分もまったく同じであることを強調するため。

ウ　柳田の方法は、日本映画とは何かという問いを解決する大きな手がかりとなり、とても参考になったことへの感謝を示すため。

エ　柳田の感慨は、日本映画研究に悪戦苦闘してきた自分自身の思いと重なり、共感がなみなみならないものだということ強調するため。

オ　短い独白のなかに、こっそり「自分」や「人の気づかぬ」という表現を用いた柳田の自負心に対して、とても共感を覚えていることを示すため。

〔　　〕

問４　傍線部③の理由として適当なものを、次から選べ。（8点）

ア　日本人の誰も関心を持たないような意味のない学問領域だから。

イ　その分野に関心を持つ研究者が存在するようになったから。

ウ　まだ誰も手をつけていない学問領域を研究したかったから。

エ　何人もの独自の研究者が出てきて、自分の立場がなくなったから。

オ　イタリア人留学生に教えるべきことはすべて教えたから。

〔　　〕

問５　傍線部④とほぼ同じ意味の表現を、本文中から五字以内で抜き出せ。（7点）

〔　　　　　〕

問６　傍線部⑤とは具体的にどういうことか。三五字以内でわかりやすく説明せよ。【読みのセオリー】（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

【解答】

漢字　ａこうずか　ｂ隔（たり）　ｃ犠牲　ｄ輩出　ｅおおげさ

問１　Ａ＝ウ　Ｂ＝エ　Ｃ＝ア

問２　日本映画研究という知の領域を学問として成立させること。（27字）

問３　エ

問４　イ

問５　悪戦苦闘

問６　映画研究の主題を次々と新しいものに変えることで、その領域を広げること。（35字）

●語注

柳田國男＝一八七五年〜一九六二年。民俗学者。代表作に｢物語｣｢｣｢海上の道｣などがある。

勅使河原宏＝一九二七年〜二〇〇一年。映画監督・華道家。代表作「砂の女」。日本人初のアカデミー賞審査員。

増村保造＝一九二四年〜一九八六年。映画監督。一九五二年、イタリア留学、フェデリコ・フェリーニやルキノ・ヴィスコンティらに学ぶ。

今回のシリーズ＝『日本映画は生きている』全八巻。岩波書店、二〇一〇年刊。

■覚えておきたい語句

□４好事家…………………珍しく変わった物事を好む人。物好きの人。

□７不得手…………………得意でないこと。

□７袂を分かつ……………人との関係を断つ。

□９学の泰斗………………その学問の道で最も権威のある人。

□11悪戦苦闘………………困難に打ち勝つために必死に努力すること。

□22ジェンダー……………社会的・文化的に形成される性差。

□25無我夢中………………我を忘れるほど、物事に熱中すること。

□27腐心……………………心をいため悩ますこと。

【読みのセオリー】

★筆者の感じ方・ものの見方を読む

　随筆は、筆者独自の感じ方やものの見方が提示される。

　筆者が何を感じ、伝えたいのか。自分の体験を通して語られることが多い。また直感的な言い方や、比喩を用いた表現、特別な表現などが多用される傾向がある。筆者の感じ方によりそって読み取っていくことが大切だ。

〔要　約〕

［３］…筆者の柳田へのあつい共感。

［５］…自分のしてきたことのまとめ。

　柱の3段落と5段落を中心にまとめる。

　　　　　↓

　民俗学成立と社会的認知のためすべての領域を独力で取り組んだ柳田の感慨に、なみなみならぬ共感を覚える。自分も日本映画研究という知の領域を学問として成立させ、その領域を拡大するために悪戦苦闘してきた。（98字）

〈筆者＆出典〉四方田犬彦（よもた・いぬひこ）一九五三（昭和28）年大阪府生まれ。東京大学卒業。明治学院大学で教鞭を執った。専攻は、比較文学、映画史、漫画論、記号学。著書は『映画史への招待』『モロッコ流滴』『ソウルの風景』『ルイス・ブニュエル』など多数あり、数々の賞を受賞している。本文は、「日本映画の『新約』のためにーシリーズ『日本映画は生きている』を終えて」『図書』（岩波書店、二〇一一年四月号）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊問５差し替え

問　20〜21行目「わたしの大学院〜到来するようになった」とあるが、これはどういうことを意味するのか。30字以内で説明せよ。

［答］　その領域に関心を持つ研究者が存在するようになったこと。（27字）

＊新問

問　2行目「之まで人の気づかぬ方面」とほぼ同じ意味を表す語句を本文中から20字以内で抜き出せ。

［答］　誰もが関心さえ向けようとしなかった領野（19字）（19行目）

＊新問

問　筆者の柳田国男に対する強い敬意をあらわす語句を、本文中から漢字三字で抜き出せ。

［答］　大柳田（9行目）